



Title	「-て」形動詞が関わる動詞複合の、ヒンディー語からの考察：アスペクト表現を中心に
Author(s)	西岡, 美樹
Citation	日本語・日本文化. 2002, 28, p. 95-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10965
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

<研究ノート>

「一て」形動詞が関わる動詞複合の、 ヒンディー語からの考察 ——アスペクト表現を中心に——

西岡 美樹

1. 序説

日本語の動詞複合は、形態に着目する場合、連用形接続のものと「一て」形接続のものに分かれる。「書きはじめる、書きつづける、書きおわる」のように、連用形接続の「はじめる、つづける、おわる」はこれまでアスペクトを表わす動詞の認定をなされている。一方、「一て」形と複合するものは、「いる／ある、しまう、おく、いく、くる、みる、みせる、やる、もらう」がある。このうち、日本語学のアスペクトもしくはテンスの研究で例文によく見られるのは「いる／ある」、「しまう」、「行く」、「来る」である。金田一（1955）、町田（1989）、工藤（1995）によれば、例えば「タ」 vs. 「ティル」との対立が相の差と見られるわけだが、その相の種類には、完成相／完結相、継続相／非完結相という具合に学者によって設ける相はさまざまである。また、広辞苑には、「動詞の意味する動作の様態・性質（例えば開始・終結・継続・反復）などの差を表わす文法形式」という具合に相を定義してある。日本語学では伝統的に動詞を意味の上で、状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、そして、時間的な観念を超越した状態動詞ともいえる第四種の動詞〔金田一（1955）〕という具合に分別し、動詞そのものの単純形式や「ティル」、「テアル」、「カカル」等の複合形式との結合で対立を試み、意味的な下位範疇化、すなわち使用法を議論している。

ヒンディー語にも動詞を複合することによって、先の「動詞の意味する動作の様態・性質」を表わす形式が存在する。そして、この種の議論も、ヒンディー語

学の伝統的な文法書でよく見られる。ただし、ヒンディー語の場合、語ごとに分割して記述するので、成分分析可能な「テイル」（「一て」形+「いる」）を一括して「テイル」として扱うことはまずない。実際、日本語学のテンス vs. アスペクトによる意味もしくは用法の研究では、「ル(タ)」vs.「テイル(タ)」でも問題ない。

改めてヒンディー語の伝統文法に目を移すと、以前は動詞の形態を基軸にした複合体を分類、列挙するに止まっていた。その複合動詞（compound verb）の数は学者によりさまざまであったが、それらを踏まえた上で、Vī. Jagannāthan や P. Hook により後続する動詞が機能の面から分類されるようになった。前者はこれを彩飾動詞（*ramjak kriyā* = coloring verb）と呼び、後者は、ベクトル動詞（vector verb）と呼んでいる。この範疇に含まれる動詞は、本来の動詞としての意味を失いかけたもので、意味の上ではっきり説明し難いが、命題、つまり例を挙げると「彼が帰ってしまった」の「彼が帰った」の部分の意味的な彩りもしくは方向性もたらす動詞群である、という位置付けがされているのである。Hopper & Traugott (1993) は、類型論の立場からこのような動詞群を文法化（grammaticalization）の一過程にある、拘束形式である助動詞（auxiliary verb）になる前段階で、意味が漠然化（bleaching）された動詞群としている。つまり、両氏は動詞→助動詞に至る文法化の過程にさらなる一過程を看取しているのだが、それは動詞本来の意味を漠然化させたものの集合体のことである。動詞の意味が漠然化しているため、しばしば、開始、終了（終結）、持続（継続）、完了（完結相）の意味素性が表に出がちで曖昧になってしまふが、日本語学で扱われているアスペクト表現に関わる動詞群もまた、上記のような相を設けられていることから分かるように、この一過程に位置すると考えてよいだろう。

日本語の形態に焦点を当てると、開始については連用形接続の「はじめる、だす、かかる」があり、終了は連用形接続の「おわる」、持続は連用形接続の「つづく」の他、「一て」形接続の「いく、くる」、完了は「一て」形接続の「いる／ある、しまう」がある。このうち、連用形接続の「はじめる、つづく、おわる」や「一て」形接続の「いる／ある、しまう」がアスペクト表現の範疇に属するものという認識はほぼ共通である。これは、接続形態の差異こそあれ、これらの動詞が一つのスケールの中に位置するからである。そのスケールとは、先述の拘束形式

化する助動詞から本動詞に至る間の「助動詞→ベクトル動詞→本動詞」の過程である。これらは各個に独立したものではなく連続体を成すものであり、特に自由形式（すなわち「ベクトル動詞→本動詞」）の幅が広いのである。ある動詞が原義を保ったまま使用される場合と意味が漠然化した補助動詞として使用される場合があるのは、そのためである。ヒンディー語学では、それらに対し彩飾動詞もしくはベクトル動詞の用語を用いているので、一見、日本語学で扱われるアスペクトもしくはモダリティ的な動詞（補助動詞の類）などとは別のカテゴリーを提示しているようであるが、根本的には、同じ範疇に属するものと推察される。

本稿では、以上の推察を基に、複合形式が表わす存在、完了に焦点を当てつつ、日本語の「一て」形とアスペクト表現の動詞、およびヒンディー語の動詞複合の形式を対照させ、両言語の並行性および形態の差異を観察し、それぞれの特徴もしくは共通点を記述する。また、同時にヒンディー語と照らし合わせた場合、日本語のアスペクト表現といわれるものがどのような特徴を持つかを分析する。

本論に入る前に、両言語の動詞が複合を成す場合の形態および複合形式を概観しておこう。日本語の動詞複合のタイプについては、受身接辞「一れる／一られる」、使役接辞「一せる／一させる」を動詞の語幹に接続するタイプ、「し始める／終わる」のような連用形に接続するタイプ、そして、本稿で焦点を当てる動詞の過去形「タ」が連用接続用に変化した「一て」形を接続するタイプがある。ここでは、便宜的に前にくる動詞を第一動詞、後続の動詞を第二動詞と呼ぶ。なお、日本語の補助動詞も含め自由形式の形跡を持つ動詞を膠着接辞と対立するものとして本動詞と呼ぶことにする。

	第一動詞	+	第二動詞
1	語幹	+	膠着接辞
2	連用形	+	本動詞
3	一て形	+	本動詞

対するヒンディー語はどうか。インド・ヨーロッパ語族の言語ではあるが、これも基本的にOV言語であり日本語の属する語順類型と同じである。しかしながら、ヒンディー語の第一動詞に接続し得る形態には、以下の表に挙げるよう 6

つある。

	第一動詞	+	第二動詞
1	語幹	+	膠着接辞
2	語幹	+	本動詞
3	不定詞	+	本動詞
4	未完了分詞	+	本動詞
5	完了分詞	+	本動詞
6	語幹 -kar	+	本動詞

概略を述べておくと、タイプ1は日本語にみられるようなヒンディー語の膠着接辞¹⁾である。これはヒンディー語ではもはや使役にしか残っていない²⁾。タイプ2から5は、ヒンディー語学のいわゆる複合動詞として扱われるタイプである。タイプ6は語幹に接辞‘-kar’が付いたものである。ヒンディー語では「接続分詞」もしくは「先行時分詞」と呼ばれ、意味的な制約はあるが、多分に生産的なものでどんな語幹にでも膠着しうる。

これらの形態のうち、日本語の「一て」形に関わるものは、2から5のタイプ、もしくは6のタイプである。2から5までの第一動詞の形態において、語幹もしくは不定詞は、絶対値的な動詞形態であるが、未完了分詞の場合、事象の未完了性、完了分詞の場合、事象の完了性をもつ。なお、本来的に形態が示すアスペクトは、この2つということを付言しておく。6については、上述のように6のタイプは生産的なものなので動詞を複合して特殊な意味を醸し出すそれには該当しない。例えば、日本語の「見て行く」とした場合、どちらも本動詞としての意味を持った場合の「出発前にちょっといろいろ見て（から）行くよ。」と「以下でこれから的情勢を見て行く。」では、第二動詞の意味がおのずと違う。第二動詞に本来の意味を持ち合わせたものがヒンディー語のタイプ6になる。

本稿では、先に挙げた日本語の「一て」形接続の動詞「いる／ある、しまう、おく、いく、くる、みる、みせる、やる、もらう」のうち、存在と完了に焦点を当てるため「いる／ある」、「しまう」を主に扱うことになるが、これに「おく」を加えて、次章から、順にヒンディー語の用例を挙げながら観察していく。

2. 分析

2.1 存在を表わす動詞との複合

日本語の存在を表わす動詞としては「いる／ある」がある。本動詞としての単独使用の場合、「いる」は主語が生物の場合に使用されるのに対し、「ある」は主語が非生物、すなわち往々にして物の場合に使用されるように見えるが、他の動詞との複合形式になると必ずしもそうではない。「木が立っている。」「花が萎れている。」は「いる」しか使用できない。植物もまた生物だと考えることもできるが、もちろん植物だけではない。「車が走っている。」という文では「いる」のみを使用し、「車が走ってある。」とは（一部方言を除いて）いうことはない。「電信柱が立っている。」もしかりである。「車」も「電信柱」も本来ならば有機的な生物とは言えないが、両方ともあたかも有機物のような振る舞いをする。車は動くものであるし、電信柱にしても直立不動である様は、人の立つが如しで、そのためか、動詞にも動きを伴うものが使用される。

このように、複合形式になると、主語が非生物であっても、動詞によっては「いる」が使用される。実際、これは、主語の意味素性のみが決め手になっているわけではなく、主語が共起させる動詞の動態・静態に関わりがあるのである。例を挙げると、「箸が折れている。」「箸が折ってある。」のように動詞を置き換えただけで、「いる／ある」の使用が変わってくる。このことから推察して、主語として立つものと動詞との共起関係は別次元のものであり、動詞自体が保有する動態（ダイナミック）・静態（スタティック）と考えてよいだろう。日本語の存在を表わす「いる／ある」の使い分けは、主語の意味素性に基づくものと無関係なわけではないが、それよりもむしろ動詞の持つダイナミック＆スタティックが指標となっていると考えれば、たとえ物が主語であっても、それが動きを伴う動詞を共起できる場合は、「いる」を使用できるわけである。

このように、用法の上で細かい制約がかかってはいるが、日本語の存在を表わす動詞には2つあるのである。一方のヒンディー語には、これに相当するものとしてコピュラ動詞がある。このコピュラ動詞は、名詞や形容詞を述語とする場合にも使用され、日本語の終助詞「だ」（「です、ます」調では「です」）の機能も包括する。動詞を述語とする場合にも使われるが、特に現在時制の単純形を消失し

た現代ヒンディー語では、コピュラ動詞が必要不可欠な要素になっているのである。

日本語もヒンディー語も、このタイプの動詞複合に関して形式上の並行性をもつわけだが、以下で具体例をみていく。

2.1.1 「いる」

次の文は日本語の「て」形+いるを使用した一般的な文である。

(1) 私は毎日学校に行っている。

(2) maim̥ har roz skūl jātā hūṁ.

私 每 日 学校 行く—未完了 コピュラー現在

「私は毎日学校に行っている。」

(1) は、日本語の現在時制をあらわす複合形式であるが、現在時制をあらわす中立文では「私は毎日学校へ行く。」というように、「一て」形+「いる」を使用せず、動詞の原形を使用することも可能である。一方、ヒンディー語では、「未完了分詞」+「コピュラ動詞」をもって現在時制を表わす。これ以外に現在時制を表わす形式はなく、(現在時制の否定文を除いて) 未完了分詞止めはできないことから考えると、実際はコピュラ動詞が現在の存在を表わしているわけである。

ところで、日本語には、「一て」形でなく「連用形」に「おる（「いる」の異形）」を複合させることがある。これは、今となっては方言レベルに現存する形式で、(1) の場合は「行き・おる（よる）」になる。方言内で、この複合形式は、しばしば「一て」形の複合形式と未完了・完了の対立を成す。この中では、ヒンディー語の未完了・完了と形式上平行しているわけだが、標準日本語では、「連用形」+「存在動詞」の形式はなくなり、「一て」形で代替しているのである。国語学では「て（で）」を接続助詞と呼んでいたわけだが、形態素の出自を考えると、完了相の片鱗が残っている。「一て」形は本来、動詞の過去形「一た」が連用形変化（すなわち他の要素との接続用に）したものなのである。現代標準日本語では、「一て」形を未完了・完了の区別なく動詞の接続様式という機能のみで使用しているが、波状理論に従えば、日本語にも未完了・完了の対立が古くは存在したものと推察される。

では、実際、「一て」形の完了相そのものを具現化した例を見てみよう。

(3) 父は今会社に行っている。

(4) pitā ji ofis gae haim.

父 尊称 会社 行く一完了 コピュラー現在

「父は会社に行っている。」

(3) は(1)とは違い、「父親が現在会社に行った状態にある。」という、完了相を表わしたものである。前述の通り、日本語では(1)も(3)も形式が同じであるが、ヒンディー語では「完了分詞」+「コピュラ動詞」の複合形式になる。これは、ヒンディー語学では現在完了と呼ばれるものである。日本語の「一て」形が、ヒンディー語における事象の完了状態をも包括していることは明らかである。ただし、用法の点で言えば、日本語の場合、「お父さんは会社に行った。」という単純形を使用するだけでもことが足りることが多い。「お父さんは?」と聞かれて「会社に行ったよ。」「会社に行っているよ。」とどちらも言える。前者は、命題に当たる事象を表わす動詞が焦点になっている場合に使用されるが、後者は、存在に焦点がある場合に使用される。したがって、後者は中枢にある命題（「行く」vs.「行かない」）に直接関わるものではないオプション形式ということになるので、敢えて使用する必要がない。つまり、前者の単純形式が後者の複合形式を包括するものであるといえよう。

また、ヒンディー語のこの形式は、時間の幅が広くなると、人の経験を表わすことがある。つまり、文脈が「これまで（生来）」の時間幅を持っていれば、「何かをした状態にある」というこの形式が人の経験を問う場合にも使用されるのである。日本語の方はといえば、通常、動詞の単純過去形を使う³⁾。ヒンディー語でも、実際、必ずしもこの形式を使用しなければならないということではなく、行為の完了を兼ねた単純過去形をそのまま使用することも多々ある。

ヒンディー語のこの複合形式は、時間の幅により完了から経験の意味に反映されるわけだが、これは文脈に依拠する上に、相対的には瞬間的な存在を表わす場合に使用される傾向が強いようである。

では、日本語の「一て」形+「いる」はどのような時間幅を持っているのか、さらに以下の文を観察してみよう。

(5) だから今こうやって話している。

(6) islie maiṁ kah rahā hūṁ.

だから 私 言う—語幹 いる—完了 コピュラー現在

「だから、僕が今言っている。」

(5) も(1)、(3)と同様の形式であるが、日本語の「今」が示すように、現在進行中の事象である。ヒンディー語はこの場合も別の形式、すなわち、進行形（「語幹」+「rahā」+「コピュラ動詞」）を使用する⁴⁾。

(7) 昨日、父がそのことを言っていた。

(7) の「言っていた」は、「昨日」という副詞により時間的な制限がかかるが、その中の時間的な幅を考えると、文脈により2通りに解釈できる。1つは過去の限られた時間内に継続的にその状態に存在した場合、つまり進行形の過去時制である。ヒンディー語では(6)で挙げた複合形式を使用しコピュラ動詞を過去時制にする。

(8) kal pitā jī yah kah rahe the.

昨日 父 尊称 これ 言う—語幹 いる—完了 コピュラー過去

「昨日、父がこう言っていた。」

(8) の例で使用している複合形式は過去進行形である。(7)に対するもう1つの解釈として、過去のある時点で瞬間に存在した場合がある。つまり、「言った状態にあった。」となるわけだが、(4)に挙げた例のコピュラ動詞が過去時制になる。それが以下の(9)の例である。

(9) kal pitā jī ne yah kahā thā.

昨日 父 尊称 能格 これ 言う—完了 コピュラー過去

「昨日父がこう言っていた。」

これは、ヒンディー語では過去完了と呼ばれるもので、(4)で挙げた現在完了と時制上の対立を成す。文字通りは「言った状態にあった。」ということになるが、日本語で「言った状態にあった。」ことに対し「言っていた」という複合形式を使用する必要はない。というのは(3)の場合と同様、通常「言った」という単純形式の過去時制だけでことが足り、「一て」形+「いる」を使用するのはオプション機能となるからである。

(10) a. 佐藤：田中君、昨日はパーティーに行かないって言っていたじゃない。

b. 佐藤：田中君、昨日はパーティーに行かないって言ったじゃない。

田中：そう言ったけど、気が変わってね。

(10) の a、b のように、「言っていた」、「言った」、どちらでも文は成立する。口語では b の単純過去を使用したものよりも、a の「言っていた」を使用する確率が多いような感を受ける。また、a の場合、b のような単純な過去の事象を言うわけではなく、昨日の時点での時間的な広がりを生む。それは、これまで述べてきたように「一て」形が未完了の事象に対しても使用できるため、覆う時間的な幅が曖昧になるためであろう。ヒンディー語でこの複合形式に相当するものは、先の進行形か、(3)、(4) のところでも述べたように、「言った状態にあった」という事象の完了を表わす「完了分詞」+「コピュラ動詞」のコピュラ動詞を過去形にしたものどちらかである。ただ、(3) の場合と同じように、日本語は「いた」の部分がオプションになるので「言っていた」を「言った(状態にある)」で置き換えることができる。

では、時間的な幅をさらに広げた例を挙げよう。

(11) 父はあの頃よくそう言っていた。

(11) もこれまでの形式と同じであるが、副詞「あの頃」で示されているように、上述のものに比べて時間的な幅が広くなる。「以前」、「かつて」などと共に起させることもできるパターンだが、ヒンディー語では以下のように「未完了分詞」+「コピュラ動詞」の過去時制の形式になる。

(12)	un	dinom	pām̥dav	dvaitavan	mem
	それらの	日々	バーンダヴァ	ドヴァイタの森	に
	rahte		the.		
	住む—未完了		コピュラ—過去		

「その頃、バーンダヴァたちはドヴァイタの森で暮らしていた。」

この形式はヒンディー語で習慣過去と呼ばれているが、これも、日本語にしてみれば副詞を共起させる点が違うが、動詞の複合で表わす点は同じである。その際、「一て」形に対応するのは未完了分詞である。ヒンディー語では、事象が継続

する場合は、未完了分詞を使用するわけである。行為の未完了性を反映したものであろうが、日本語の方はやはり「一て」形である。

ヒンディー語の複合形式と比べると、日本語の「一て」形+「いる」は、時制や相の観点からかなり広範囲な枠組みを包括する。

本節の最後に、ヒンディー語における3つの動詞を複合する形式を挙げる。日本語では動詞2つの複合は頻繁に見られるが、3つ以上となるとあまりお目にかかるない。「もう仕事はてしまっている」や「宿題をやってあげてしまった」などないわけではないが、どちらかというと文語ではなく口語表現的な感を免れない。

- (13) merā betā jāpān mem āyā huā
私の 息子 日本 に 来る—完了 コピュラー—完了
hai.

コピュラー現在

「うちの息子は日本に来ているよ。」

- (14) Šakuni kā phāsā višeš prakār se banā
シャクニ の 賽 特別の 種類 で 作られる—完了
huā thā.
コピュラー—完了 コピュラー過去

「シャクニの賽は特殊にできていた。」

(13)、(14)は、現在完了の複合形式にさらに存在を表わすコピュラ動詞がついている例である。文そのものは「息子が来た状態にある」、「賽が特別に作られた状態にある」にさらに「その状態が現在／過去に存在する」となっている。冗長的な表現にも感じられるが、これは事象の完了状態を強調する場合に使用される。

この複合形式には命題が3つあるということを考えると、「作られて・いる」vs. 「作られた・状態に・ある」の対立構造が明らかになるが、日本語の場合、後者の「状態に」の部分はあくまで冗長効果で、いかにももってまわった言い方になる。通常はこのように言わず、前者の「一て」形+「いる」の形式を使用することの方が多いであろう。というのは、上述のとおり日本語では、動詞を3つ以上連続させること自体があまりないからである。命題の対立構造を反映しようとするな

らば、日本語の場合は形式名詞「状態」を使用せざるを得ないが、ヒンディー語の方は、この形式が普通に使用できる。これについては、次節でも観察することになる。

2.1.2 「ある」

「ある」は存在を表わすという意味で「いる」の異形ともいえるが、その使用法が先に述べたように動詞の動態と静態により制限がかかり、本動詞として使用した場合の生物・非生物のような意味素性が適當ではなくなるのは前述のとおりである。ここでは、「いる」が使用できない「ある」を使用した例を観察する。

(15) テーブルの上にご飯が作ってある。

(16) 壁には彫刻が施してある。

(15) の「ご飯が」もしくは(16)の「彫刻が」は、それぞれ「ご飯を」、「彫刻を」に変えても成り立つ。ここで「いる」を使用することもできるが、それには「ご飯」、「彫刻」を主語としての「が」で表示し、動詞を受動態「作られて」、「施されて」に変える必要がある。(15)を例に取れば「テーブルの上にご飯が作られている。」になる。自然な日本語ならば、「作られる」の一語彙化した動詞「できる」が「一て」形接続で使用される。

(17) dīvārom̥ par nakkāśī kī hui hai.

壁(複) 上に 彫刻 する—完了 コピュラー—完了 コピュラー—過去
「壁に彫刻がしてある。」

(17) は、日本語の例(16)のヒンディー語訳であるが、前節の(13)、(14)と同じく構造上「彫刻を(すでに)している状態にある。」となっている。この文では「する」の行為者は明示されていない。しかしながら、「誰かが行為を行った。」という中枢の命題を考えれば、行為者は当然存在する。それが以下の文である。

(18) kalākārom̥ ne dīvārom̥ par nakkāśī kī

芸術家(複) 能格 壁(複) 上に 彫刻 する—完了
hai.

コピュラー—現在

「芸術家たちが壁に彫刻をした。」

(18) は、(17) で欠落していた行為者を補完した文である。ヒンディー語の場合、行為者は能格となり「彫刻」という目的語が絶対格となる。すなわち構文上の主語は「彫刻」の方である。「彫刻」が目的語でありかつ主語ともなるこの文で注目したいことは、「施して」の位置に動詞「する」の完了形がきていることである。日本語の方も目的語が「が」もしくは「を」表示できることを考えると、動詞も等価の要素がきているものと考えられる。この場合、ヒンディー語は必ず完了分詞がくる。日本語でも連用形ではなく、「一て」形を使用する。両言語の並行性が形態に現れている例である。

この「人が何かをした」という命題を存在文に埋め込む例は日本語にも見られる。

(19) 僕は試験勉強を完璧にしてある。

(18) のヒンディー語の例文と同じ構造をした例が、この(19)である。「僕は試験勉強を完璧にした」という文を「そういう状態にある」に埋め込んだものである。「完璧にする」という行為は完了した状態にある。

(20) ?僕は試験勉強を完璧にしている。

同じ「一て」形+いるの形式を取っても、(20)の場合は、眼前の完了状態を表わすには少々無理がある。これは、「一て」形と「いる」の複合が覆う時間的な幅が広過ぎ、曖昧になるためだと考えられる。また、「いる」が要求するダイナミズムもこの文が不適格な要因の一つと推測される。先の例と同じように、受動態の「されて」にすれば、いくらか容認可能な文になるが、その場合は「僕は」を欠落させなければならない。同時に「試験勉強を」の「を」表示を主格表示にすることになる。

(21) 試験勉強は完璧にされている。

(20) を(21)のように受動文にした場合は、「ある」ではなく「いる」を使用する。これは、「いる」が動詞の受動というダイナミズムを要求するためと考えれば、筋が通る。

(22) 僕は、試験勉強は完璧にしてある。

(22) は、(20)の目的語の「を」に「は」を代替させたものである。「僕」と「試験勉強」という主語が連続しているかのごときであるが、「僕」に付与されて

いる「は」は、話題を提示するものであって主格表示ではない。「試験勉強」に付与されている「は」は主語もしくは目的語の代替表示であり、「が」もしくは「を」である。格表示の曖昧さは免れないが、「いる」を使用するよりも「ある」の方が一般的である。

ところで、ヒンディー語の方には(17)に挙げた完了状態の強調を表わすため、動詞を3つ連続させた例の中に、以下のような文もある。

- (23) maimne āp ke lie bahut acchi kār dekhī^{hui} hai.
 私+能格 あなた の ため とても よい 車 見る一完了
 コピュラー完了 コピュラー現在

「私は、あなたのためによてもいい車を見つけてあるよ。」

この例は、ヒンディー語版「一て・いる／ある」形式の文そのものを、存在を表わす別の命題に埋め込んだものである。これは「見た状態にある」ということになるが、Vi. Jagannāthanによると、動詞の語幹に‘rakhnā’「おく」という動詞を付けたもの（後節で述べる）とほぼ同じ意味を持つものという。そちらは、形式上、日本語の「見ておいた」とよく似た表現である。通常は「おく」を使用するらしく、(23)のような表現法は、氏曰く比較的新しい表現だという。

2.2 完了過程を表わす動詞複合

日本語には、「一て」形+「いる／ある」とは違った完了の表わし方をするものがある。「一て」形に動詞「しまう」を複合する形式は、その代表的なものであろう。広辞苑によると、「しまう」は、「济ます、やめる、片付ける」のような原義を持ちつつ、アスペクト表現ともいえる『(動詞の連用形に助詞テのついたものに接続して) その動作が完了したことを表す。』ような動詞である。同辞書では、この複合形式の用法を、『①すっかり…しおわる。②完全に…する。／ほんとに…する。③(多く、助動詞タを伴って) もはやどうにもならない、とりかえしのつかないことになるの意を表す。』という具合に下位区分してある。

ヒンディー語はというと、Vi. Jagannāthanの区分に従えば、完了を表わす動詞には、‘jānā’「行く」、‘lenā’「取る」、‘denā’「与える」があるという。この他に語

幹に接続する第二動詞には、「*uṭhnā*」「起きる」、「*baṭhnā*」「座る」、「*dālnā*」「注ぐ」、「*parṇā*」「生じる」がある。最初に述べたベクトル動詞は、これらの動詞群を指す。これらすべて過去時制で使用すれば、ある種の完了を表わすが、それと同時に本来それぞれの動詞が持つ方向性も併せ持つことになる。この中で頻繁に使用されるのが、「*jānā*」「行く」である。日本語もヒンディー語も第二動詞に動詞を使用して完了を表わす形式があるが、動詞そのものの原義が同じなわけではない。しかしながら、事象の完了を示す漠然化した動詞ということで、ここではその2つを主に観察していく。

なお、ここから先は、第二動詞が微妙なニュアンスを表わすものになるが、メタ言語は本動詞として使われる場合の原義で記述する。

2.2.1 「しまう」

(24) 彼は行ってしまった。

(25) vah calā gayā.

彼 歩く—完了 行く—過去

「彼は行ってしまった。」

(24) の日本語文に相当するヒンディー語の例が(25)である。ここで挙げた例は、完了分詞+「*jānā*」である。この複合形式は、通常、受動態を表わすものだが、ここでは慣用化したものになっており、「行ってしまう、立ち去る」という意味を表わす。単に「行った」という動詞単独で表わすのとは異なり、その場にいないのが前提になる。

中枢の命題が「行く」ではない例も見てみよう。

(26) 私の友達は、私より早くご飯を食べてしまう。

(27) is van mem jo bhī ātā hai,

この 森 に 関係詞 も 来る—未完了 コピュラー—現在

maiṁ use mār kar khā

私 それを 殺す—語幹 接続分詞 食べる—語幹

jātā hūṁ.

行く—未完了 コピュラー—現在

「この森に入ってくるものはみな、わしが食い殺してしまうよ。」

(26)、(27)で使用している動詞は「食べる」と‘khānā’である。ヒンディー語の例は(25)の慣用的複合形式で使われていたのと同じ第二動詞であるが、接続形態が完了ではなく語幹になっている。両方とも、先述の「しまう」の使用法にある「完全に／すっかり／本当に」のような、命題の行為が完了する過程をニュアンスとして添える表現である。

次の例は、使用法の③にある「もはやどうにもならない、とりかえしのつかないことになるの意を表す。」に入るものである。

(28) 嘘ばかりついていると、人の信用を失ってしまうよ。

(28)では、「失う」という動詞が使われているが、もともと「失う」という動詞自体が否定的な意味を持つものであるため、オプションの「しまう」が完了の過程を表わすと同時に、「どうにもならない、とりかえしのつかない」という意味を含むことになる。

(29) tum apnā vādā nibhāne par majbūr
君 自分の 約束 守る一不定(斜) 上に 無力な
ho jāoge.
なる一語幹 行く一未来

「あんたは、約束を守らなければならなくなってしまうぞ。」

(29)では、中枢の命題である‘vādā nibhāne par majbūr ho’までを「約束を守らなければならなくなる」とすれば、上記の例は「約束を守らなければならなくなってしまう」という、命題が一つ増えたものになる。中枢の命題のみでも、意に反して行われること、つまり、「とりかえしのつかないこと」を表わすわけだが、それにプラスαで日本語の「しまう」の使用法③と同様の機能を持つものと考えられる。

(30) hamēṁ paresānī islie hai ki
私たち一与格 心配 そのため コピュラー現在 同格接続詞
kabhi kisi ko patā na cal jāe.
いつか 誰かに 情報 否定辞 動く一語幹 行く一仮・未来
「いつか誰かに知れてしまわないと我々は心配している。」

(30) では、従属節内にこの複合形式が使用されている。「知れてしまう」という③の用法に合致した例である。複合形式が否定辞を伴うが、ここで注目すべき点がある。それは、橋本と松本(2000)が日本語の「てしまう」と否定形「ない」が主節内、従属節内のどちらでもあまり共起しないことを指摘していることである。先の Vi. Jagannāthan が類似したことをヒンディー語について述べている。氏は、ヒンディー語では、上記の例のように従属節内で使用される場合を除いて、彩飾動詞を複合したものに否定文は存在しないと指摘している。つまり、主節ではこの複合形式と否定辞は共起することがあまりないということになる。両言語内の動詞複合に類似した共通点が見られるわけだが、これについては後章で議論することにする。

- (31) maim̥ yahāṁ ā gayā hūṁ.
 私 ここ 来る一語幹 行く一語幹 コピュラー現在
 「(言うとおり) ここに来たぞ。」

(31) の ‘ā jāna’ は、強いて言うなら日本語の「やって来る」に近い複合形式で、「来る」という行為が完了してしまうことを示している。ここは、それにコピュラ動詞がついたものになっている。ヒンディー語の第二動詞に「しまう」を当てて逐語的に解釈するならば、この複合形式は「来て・しまって・いる」となるわけだが、日本語では「やって来て、今ここに存在する」という時に「一て」形+「いる」を使用する必要がない。「いる」の時と同じく、動詞の単純過去形「た」で十分である。つまり、日本語の過去形はやはり完了も兼ねるということは、存在動詞を扱った前節で述べたとおりであるが、ベクトル動詞の範疇にあるものも等価値の日本語に反映できないのである。

ところで、P. Hook の提唱するベクトル動詞という語を Hopper & Traugott (1993) が、文法化 (grammaticalization) の一過程にある意味が漠然化 (bleaching) された動詞群としており、その際、完了を表わすものとして、ヒンディー語の ‘lenā’ 「取る」を複合した形式を挙げている。

- (32) vāh, bahut khā liyā, kṛṣṇā!
 ああ たくさん 食べる一語幹 取る一過去 クリシュナー
 「ああ、たくさん食べたよ、クリシュナー。」

(32) の場合、日本語の文脈如何によっては、「しまう」を当てることができる。ここは会話文になるので、「食べちやつた」（「食べて」+「しまった」の融合形）を当てることも可能であろう。*'lenā'* という動詞が第二動詞に使用される場合、「すっかり食べた」という事象の完了を表わすのは確かだが、これは過去時制の時のみである。以下の例では、また違ったニュアンスを添えるものとなる。

- (33) maim̥ bīf bhī khā letā hūm̥.
 私 牛肉 も 食べる—語幹 取る—未完了 コピュラー現在
 「僕はなんとか牛肉も食べられるよ。」

(33) は (32) の複合形式を現在時制にしたものである。中枢の命題の事象に対し、「やろうと思えば、その気になれば」という前提を付け加えるものになるのである。日本語には「一られる」の可能接辞を使用したが、「(食べようと思えば)食べてしまうよ。」と言えなくもない。その場合でも、言外の意味で「やろうと思えばなんとかできる」という意を含むのには変わりない。したがって、*'lenā'* は純粹に完了の意を持つものとは言い切れない。

また、(32)、(33) で挙げた複合形式にさらにコピュラ動詞がつくものもある。

- (34) maiṁne use naukarī se nikālne kā faislā
 私+能格 彼を 職 から 出す—不定(斜) の 決定
 kar liyā hai.
 する—語幹 取る—完了 コピュラー現在
 「俺はやつをクビにすることにしたよ。」

完了を表わすだけであれば、これまで見てきた「完了分詞」+「コピュラ動詞」で十分なはずだが、*'lenā'* と接続した上にコピュラ動詞をつけるというこの複合形式もまた、れっきとして存在するのである。確かに、完了は完了なのだが、純粹な完了は単純過去形を兼ねた完了分詞を使えばいいことである。したがって、これがもっと別のニュアンスを(少なくとも (33) を見る限りには)付け加える複合形式であることは容易に察しがつく。ここで意味が漠然化されるというのが関わってくるのだが、原義の「取る」という行為は、自らが意識的に行うことである。第二動詞として使用される場合、そのニュアンスが温存されているとすれば、好むと好まざるとに関わらず自発的に行行為を行うというニュアンスが付け加

わるのである。現在形使用の場合「その気になれば…」というニュアンスが加わつても何らおかしくはないはずである。もっとも、これは日本語に訳す時、等価値の動詞では反映できない。

もう1つ、「lenā」の反意語に相当する‘denā’「与える」を第二動詞として使用することがある。以下の(35)がそれである。

- (35) Kicak kī hatyā ho gayī, kisī ne
 キーチャカ の 殺し なる一語幹 行く一過去 誰か 能格
 Kicak kā vad̥h kar diyā.
 キーチャカ の 殺し する一語幹 与える一過去
 「キーチャカが殺された。誰かがキーチャカを殺してしまった。」

日本語訳を当てると、「誰かがキーチャカを殺してしまった。」や「誰かがキーチャカを殺してくれた。」という具合になるであろう。「一て」形+「くれる」については、今回は扱わない。ただ、広い意味で行為の完了といえばそういえるが、先の‘lenā’と同様、誰かに結果を及ぼす時に使用される第二動詞である。

2.2.2 「おく」

日本語の「置く」という動詞は、「やっておく、見ておく、捨てておく、立てておく」等々、第二動詞としての頻度は高く、多分に生産的である。同じく、ヒンディー語の動詞‘rakhnā’「置く」も第二動詞として使用される。ここでは、これらの動詞がどのような使い方をされるかを観察する。

- (36) よく考えておくように。

- (37) soc rakhō.
 考える一語幹 置く一命令
 「考えておくように。」

(36) の第一動詞は「一て」形、(37)の方は語幹になっている。第一動詞の形態こそ異なるが、日本語もヒンディー語も第二動詞に同じ「おく」という動詞を使用している。意味の点においても、日本語の「考えて」vs.「考えておいて」と同じように「考える」という行為を発話段階で行う必要はなくなる。

- (38) 忘れないように、予定を手帳に書いておいた。

- (39) maimne to kurtā pājāmā pahan
 私+能格 小詞 クルター パジャマ 着る一語幹
 rakhā hai.
 置く一完了 コピュラー現在
 「僕はクルターとパジャマを着ている。」

(38) は、第二動詞「おく」を過去形にしたものである。同様にヒンディー語の例(39)も第二動詞が過去形の例である。「僕はきちんと服を着ているのに、君らは服を着ていないじゃないか。」という文脈に現れた複合形式である。日本語に訳す場合、「着て・おいて・ある」という具合に動詞を三つ続けるわけにはいかないので、逐語訳は不可能である。完了状態の意を汲んで「一て」形+「いる」もしくは、主語を排除し「一て」形+「ある」にせざるを得ない。(19)のところでも述べたが、この複合形式と(19)が交代可能なわけである。また、先の「しまう」でもそうであったが、日本語の「おく」もまた、動詞三つが連なった場合、日本語には反映しにくくなる。

過去形になっている例であったが、次は「おく」を使ったその他の例を見てみよう。

- (40) 髪をほどいておこう。

(40) の文だけならば、①「髪をほどく行為がこれから成される」、②「髪をほどく行為はすでに完了しており、そのままにしておく」という二通りの解釈が成り立つ。特に、②の意味で使用する場合は、「このまま～しておく」のように「このまま」という副詞を共起するとよりはっきりしたものになる。また、副詞を使わず①と②の違いを明らかにするために、②に対しては、形式名詞「まま」を複合した「まさに・して・おく」という形式を使用することもできる。

- (41) thīk, ise mazbūtī se pakāre rakhnā.
 よし これを 力 よって つかむ一完了 置く一不定(命令)
 「よし、これをしっかりとつかんでおけ。」

(41) の例は、(39)の複合形式とは異なり、「完了分詞」+'rakhnā'の複合形式になっている。第一動詞の完了相を反映すれば、(40)の②の解釈のように「つかんだままにしておけ」ということもできる。語幹であれ完了分詞であれさして意

味 자체は変わらないが、若干のニュアンスが形態に残されているのである。

3. 共通点と特異点

前章で「一て」形に「いる／ある」、「しまう」、「おく」を複合する用例をヒンディー語の用例と対照してみてきたが、日本語の「一て」形が網羅する時間幅が、ヒンディー語の同複合形式に比べ広いことが分かった。以下ではそれらを個々にまとめてみる。また、ベクトル動詞の特徴として頗著な否定辞との共起についても、日本語における指摘と併せて議論したい。

3.1 形態・形式の並行性について

前章の用例を観察することによって、形態および複合形式の一一致は、以下の通りである。

$$\begin{aligned}
 \text{「一て」形} + \text{「いる／ある」} &= \text{「未完了分詞／完了分詞」} + \text{「コピュラ動詞」} \\
 &= \text{「語幹」} + \text{「'rahnā' 完了分詞」} + \text{「コピュラ動詞」} \\
 &= \text{「完了分詞」} + \text{「コピュラ完了分詞」} + \text{「コピュラ動詞」} \\
 &= \text{「語幹」} + \text{「'rahnā' 完了分詞」} + \text{「コピュラ動詞」}
 \end{aligned}$$

まず、「一て」形+「いる／ある」についてまとめてみよう。形態の点からすると、全体として、「一て」形は、ヒンディー語の未完了分詞・完了分詞に相当するものであるが、完了分詞との一致を見ることが多いことが分かった。ヒンディー語の複合現在時制に当たる「未完了分詞」をも「一て」形で覆っているが、古くは日本語にもこの対立が存在したであろうことは、先述のとおりである。また、完了分詞にコピュラ動詞を複合させる場合、日本語では動詞の終止形である「一た」形で終わらせることができる。つまり、日本語では、事象が完了した状態にあることに対し、敢えて「一て」形+「いる／ある」を使用する必要がない。日本語にないヒンディー語の特徴としては、進行事象専用の複合形式があることである。日本語では、これも「一て」形+「いる」で表わす。

次に、「一て」形+「しまう」についてまとめるが、「しまう」については、ヒ

ンディー語と対照した場合、「jānā/lenā/denā」の3つで表わることができる。

「一て」形 + 「しまう」 = 「語幹」 + 「jānā/lenā/denā」

‘jānā’「行く」については、完了分詞と接続する半ば語彙化したものも見られたが、語幹と接続するものは、ほぼ「しまう」と等価の完了過程を表わすものに使用される。

最後に、「一て」形 + 「おく」の複合形式についてであるが、日本語の「おく」と同じ動詞をヒンディー語でも使用する。

「一て」形 + 「おく」 = 「語幹／完了分詞」 + ‘rakhnā’

「おく」については、日本語のそれと同様、ヒンディー語にも同じ‘rakhnā’という動詞を第二動詞に使用する。日本語の「おく」と接続する第一動詞は、もはや未完了・完了のアスペクトを越えたものとして「一て」形を使用するが、ヒンディー語の方は、第一動詞の形態が語幹の場合がデフォルトで、行為もしくは事象が完結している場合は完了分詞と接続する。つまり、形態により意味に差をつけていることが分かる。

3.2 中枢命題の否定と複合命題の否定

第一動詞が表わすところまでを本稿では中枢の命題として個所個所で扱ってきた。第二動詞が表わすものを別次元の命題として扱って以下の議論を展開したい。

まず、主節内で使用される例を見てみよう。

a. 佐藤：田中君、昨日は宿題したの。

田中：いや、しなかった。

b. 佐藤：田中君、宿題してしまったの。

田中：いや、まだしていないよ。

aの答えは、昨日の時点での宿題をしたかどうかということである。つまり、「宿

題をする」という命題を否定するだけでよいわけである。bは、複合形式「一て」形に「しまう」を付加したいわば複合命題の疑問文で、それに対する答えは「一て」形+「いる」の複合形式を使用した否定である。宿題をするという事象が完了しているか否かを尋ねているため、純粹な完了事象を表わす「一て」形+「いる」に否定辞をつけて返答できる。また、aと同様に「しなかった」という命題そのものを否定することも可能である。

c. 母：昨日のうちに宿題してしまったの。

息子：いや、しなかった。クラブで疲れていたからすぐに寝たよ。

cは、bと同じ複合命題に対する、中枢命題の否定である。事象の完了という複合命題で尋ねているが、事象が完了するも何も、事象自体が成立しなかった場合なら、このように返答することも可能である。

d. 母：昨日のうちに宿題してしまわなかったの。

息子：うん、してしまわなかったよ。まだ時間があるからね。

この場合は、質問自体が複合命題に対する否定で、かつ、答えも同じ複合命題の否定である。これは、「まだ時間が十分にあるから、昨日のうちにしてしまうようなことはしなかった。」というような場合なら使用できる。つまり、前提さえ整えば、事象の完了という複合命題ごと否定することも可能なのである。ただし、あくまで一定の環境下で成立するものであって、通常はcの例の方が多いだろう。ヒンディー語の場合も否定が存在しないというのは、cのパターンと同じ文脈の場合である。

e. A: tumhem̥ vah kitāb mil gai?

君に あの 本 手に入る一語幹 行く一過去

「あの本、手に入ったか。」

B: nahim̥ milī.

否定辞 手に入る一現在

「いや、手に入らなかった。」

この場合、第二動詞の‘jānā’を「しまう」で反映できないが、敢ていうならば「手に入るに至ったか」と聞かれていると考えればよい。これに対する答えは、「手に入る」という中枢命題の否定であって、オプションの「至る」の部分を否定

することはない。

また、ヒンディー語の場合、従属節にはしばしば複合形式の否定形が現れるというが、日本語でも「明日中にこの仕事を片付けてしまわないと、大変なことになる。」、「今日話してしまわなかつたら、きっと後悔するよ。」のように、従属節に使用する場合も（若干口語的な感を受けはするが）ないわけではない。しかしながら、「明日中にこの仕事をしないと、大変なことになる。」、「今日話さなかつたら、きっと後悔する。」という単純形式も十分にありえる。両者を見比べた場合、後者の単純形式の方が中立文的なものになっている。というのは、前者の「しまう」、「しまわない」は無理に使用する必要がないからである。言い換えれば、このオプションとなる複合形式は、形式上のアスペクトとして完了事象を表わすという次元を超えており、語彙を付加して文全体に動きを醸し出すものとなっているのである。草薙（1983）は、日本語のアスペクトについて、語彙的に表現されるうる（つまり複合形式）ものに関しては独立したアスペクトとみなす必要がなく、起動相（inchoative）、終動相（egressive）のようなアスペクトを主張せずとも、氏の設けている完結・非完結相に含むことができると指摘している。これを筆者なりに解釈すると、Vi. Jagannāthan や P. Hook が、これらの動詞群をアスペクトという一括した表現をせず、彩飾動詞もしくはベクトル動詞と呼ぶにとどめていることからもうかがえるように、複合形式に使用される動詞群は、アスペクト的表現ではあってもアスペクトそのものではない、つまり文法化の過程に位置した動詞群であり、この種の動詞群が日本語にもヒンディー語にも観察されるのは極めて興味深いことである。

4. 結論

本稿では、日本語の「一て」形に接続するものとして「いる／ある」および「しまう」、「おく」を扱ってきたが、もちろん、ヒンディー語の複合形式と必ず一致するものばかりではない。しかしながら、存在を表わす動詞「いる／ある」との複合では、コピュラ動詞との複合でかなりの共通点が観察された。他の2つの動詞との複合についても必ずしも同義の動詞を使用するわけではないが、本来の意味が漠然化している点や共通点も垣間見た。原義こそ違うが、命題が複合された

場合に否定形を基本的に持たないことは、等価値の機能を果たしているものといわざるを得ないであろう。

今回扱った第二動詞の他にも、まだ日本語には「いく、くる、みる、みせる、やる、くれる、もらう」がある。このうちいくつかは、ヒンディー語のベクトル動詞と同じ原義のものがある。これらの動詞についても、ヒンディー語の他のベクトル動詞と対照し、文法化の過程を敷衍しながら分析すれば、さらに両言語の共通点が明らかになるであろう。

注

- 1) 日本語と同様、接辞ではあるが、日本語と違いヒンディー語は単語ごとに分割して書くので、動詞に膠着するという意味であえて膠着接辞と呼ぶ。
- 2) 中期ヒンディー語までは受身の接辞が存在したが、現在では消失している。
- 3) 日本語の場合、経験を表わす表現として、形式名詞「こと」を複合した「た+ことが・ある」がある。
- 4) この進行形を表わす複合形式は、近未来を表わす場合にも使用される。しかし、この場合、英語の‘be going to inf.’とほぼ同じ構造‘-ne jā rahā hai’（不定詞斜格形+進行形）を使用することも多い。

引用文献・資料

[文献]

新村 出 編 1993『広辞苑 第四版』岩波書店。

Prān. 19???. Cācā Caudhrī-7. Dāymaṇḍ Kāmiks Dāijest, Nāi Dillī.

Vyathithrday, Śrī. 1998. Mahābhārat kī śreṣṭ kahāniyāṁ. Sunīl Sāhitya Sadan, Dillī.

Satyārthī, Kamal & Guptā, Raviprakāś. 1995. Sarasvatī mānak himdī vyākaran tathā racnā. Educational Publishers, Dehli.

[映画資料]

Benegal, Shyam. 1974. *Ankur*

Roshan, Rakesh. 2000. *Kaho naa pyaar hai*

Mukherjee, Keshto & Swaroop, Jyoti. 1968. *Padosan*

参考文献

- Abbi, Anvita. 1994. *Semantic Universals in Indian Languages*. Indian Institute of Advanced Study, Shimla.
- Bhatia, Tej K. 1987. *A History of the Hindi Grammatical Tradition*. E. J. Brill, The Netherlands.
- Central Hindi Directorate. 1972. *A Basic Grammar of Modern Hindi*. New Delhi.
- Chatterji, Suniti K. 1960. *Indo-Aryan and Hindi*. K. L. Mukhopadhyay, Calcutta.
- Comrie, Bernard. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Basil Blackwell, Oxford.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell, UK.
- Dasgupta, Probal. 1997. "The External Reality of Linguistic Descriptions" in Singh, Rajendra (ed.) *Grammar, Language, and Society*. Sage Publications, New Delhi.
- Dik, Simon C. 1978. *Functional Grammar*. North-Holland Publishing Company, Amsterdam.
- Fillmore, C. J. 1968. "The Case for Case" in Bach and Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. New York.
- Guru, Kamtāprasād. 1961?. *Madhya himdī vyākaran*. Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Kāśī.
- _____ 1978?. *Himdī vyākaran*. Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Vārāṇasi.
- 橋本修・松本哲也 2000 「「てしまう」と「ない」との共起について」『筑波日本語研究』第五号、筑波大学日本語学研究室。
- Hook, Peter E. 1974. *The compound verb in Hindi*. University of Michigan, Center for South and Southeast Asian Studies, US.
- _____ 1980. *The Distribution of the function of the compound verbs in New Indo-Aryan*. II ISCALL, Hyderabad.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Hudson, R. A. 1999. The Difficulty of (So-Called) Self-Embedded Structures. 『現代言語学の射程』英宝社。
- 井上文子 1992 「「アル」・「イル」・「オル」によるアスペクト表現の変遷」『国語学』171。
- Jagannāthan, Vi. 1981. *Prayogaur prayog*, Oxford University Press, India.
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15。
- _____ 編 1976 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。
- 国立国語研究所 1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版。
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房。
- 草薙裕 1983 「テンス・アスペクトの文法と意味」、水谷静夫 他著『文法と意味 I』朝倉日本語新講座、朝倉書店。

町田健 1989 『日本語の時制とアスペクト』アルク。

Śrīvāstav, Ravindranāth. 1960. *Hindi prayog*, Sarad Bhāṣina, India.

寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。

Varma, Ramcandra. 1960. *Hindi prayog*, Sāhitya-ratna-mālā Kāryālaya, India.

_____ 1965. *Mānak hindī vyākaranā*, Caukhambā Vidyābhavan, India.

〈キーワード〉 動詞複合, ベクトル動詞, 複合命題

Japanese Verb Compounds with ‘-te’ Form, Analyzed from the Viewpoint of Hindi: Focused on Aspectual Expressions

Miki NISHIOKA

Japanese has the category of verb compounds that are used to make sentences have delicate shades of meaning different from ones using a simple verb. It is said they sometimes add some aspectual meaning to a simple verb.

In this paper, we provide examples of compounds with ‘-te’ form, which is derived from the finite past form ‘-ta’, and argue about the difference between verb compounds system in Japanese and that in Hindi. Japanese ‘iru/arū’, which is identical in morphology to the copula in Hindi, gives some aspectual nuances to sentences, e.g. present imperfect vs. perfect. The verb ‘shimau’, which has such original meanings as ‘to end, to put something away, to close one’s store’, is used as a second verb, i.e. an aspectual verb. It adds some nuance of completing an action or an event to a sentence as the verb ‘jāna’ in Hindi, whose original meaning is ‘to go’, is used as a second verb in the similar nuance. We also deal with ‘oku’ meaning ‘to place’ as an aspectual verb in the broad sense of ‘aspect’.

Besides these verbs, Japanese has other verbs of this kind, though we do not treat them here. They are ‘oku’, ‘iku’, ‘kuru’ and ‘miru’.